

新自由主義の終わりと性善説

「怒りの行進（マーチ・オブ・フューリー）」これは、私が生まれて初めて書いた新聞記事の見出しだ。1986年、19歳の時のことである。

当時はロンドン大の1年で、学生新聞の記者を始めたばかりだった。初取材の日、多数の若者が集まったロンドンの抗議デモを、いまでも鮮明に思い出す。

「利己的なサッチャーは敵だ」のプラカード。「小さな政府にノー！」のかけ声。最後は警官隊と小競り合いになり、張り切って最前列に飛び出した私も警棒でたたかれるはめになった。

「怒り」の矛先は当時、レーガン米大統領とともに新自由主義を押し進めていたサッチャー英首相だった。あらゆる分野で効率化を求める英保守党政権は、教育にも競争原理を導入した。予算削減に加え、研究成果で左右される助成金などの政府案に、大学も揺れていた。

あれから35年。当時は生まれてもいなかったオランダ人歴史家のルトガー・ブレグマン氏がオンラインメディアに寄せた記事を読みながら、時の流れを感している。「新自由主義は終わりを告げている。次は何か？」と題された記事で、彼はこう問いかけた。

過去40年にわたって世界を支配してきた新自由主義の時代は、終わりを迎えている。それに代わるものはまだ見えないが、今回のコロナ禍は、私たちを新たな境地へ導くのではないか。信頼される政府、連帯に根ざした税制度、持続可能な投資といった、新しい価値観へ――。

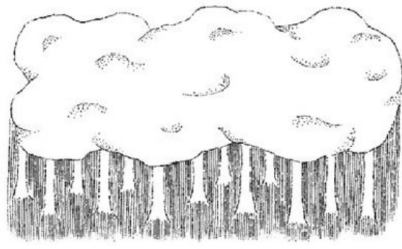
ブレグマン氏は、ベシックスインカムを提唱する著書が世界23言語で出版されるなど、注目の若手論客だ。率直な物言いで知られ、世界経済フォーラムが一

昨年に関いた年次総会（通称ダボス会議）の小会合で、こう言い放った。

「この会議では正義や格差、透明性は語られるが、だれも租税回避の話をしていない。消防士の会議で水の話をするのと同じだ。必要なのは慈善ではなく、税金の話だ。税金、税金、税金。その他はブルシット（クソどうでもいい）だ」

世界中のVIPがスイスの高級リゾート地に集まるダボス会議は、「金持ちの憩いの場」と揶揄もされてきた。発言直後から、SNSは「その通り!」「王様は裸と言った」と盛り上がった。

そのブレグマン氏の近著「Human kind 希望の歴史（上・下）」が、日本でも出版された。人間は生まれながらに利己的だという「常識」を崩し、性善説を証明しようとする試みである。これまで「人間は悪」を象徴するときにきてきた数々の出来事を調べ直し、間違



「森の雲」 絵・皆川明

いや誤解などが判明したという。「事件の真相」や「友愛の逸話」の積み上げで人間の本質が結論づけられるのかという疑問は残るが、悲観的になりがちな現代人に欠けている視点かもしれない。

ブレグマン氏は今年2月、「サビエンス全史」で知られるイスラエルの歴史学者、ユヴァル・ノア・ハラリ氏(46)とオンラインで対談した。人類が地球を支配できたのは「虚構」を信じるからだとするハラリ氏は意外にも、ブレグマン氏の

同著を「人間という生き物の見方が変わった」と評価している。

対談でハラリ氏は、異議も呈した。「数百万人規模の集団になったとき、あるいは地球の80億人がウイリスやパンデミックと闘う時に、人間が友好的な性質だけで協力できるのかは疑問だ」

一方のブレグマン氏は、「楽観的すぎる」との指摘に、こう反論した。「楽観と希望は異なる。楽観主義は一種の自己満足で、人を怠け者にする。でも希望は、物事を変える可能性を示す。私が歴史を好きなのは、いまの社会や経済の仕組みが宿命などではなく、大きく変えられると教えてくれるからだ」

岸田文雄首相が「新自由主義的政策を転換する」と訴えたとき、おやと思っただ。日本でも「新しい価値観」が真剣に議論され、所得再分配に踏み出すのか。いまのところ、その兆候はない。

歴史は何を教えたのか。人間は善なのか。35年前に書いた下手な記事を読み返しながら、ずっと考えている。